

# PONTE

書くジャグリングの雑誌：「ポンテ」

通巻第五号



撮影者：青木直哉 於 BORNFIRE FESTIVAL 2013

## 今号の記事

- ・編集長近況
- ・ピザとジャグリングの架け橋（4）<sup>ポンテ</sup> 近況とピザ回し練習会のお知らせ そいそい
- ・海外ジャグリング紀行（4）シンガポールで出会ったこと。（前編） 青木直哉
- ・編集部より

## 編集長近況

気持ちも新たに、都合で大学5年生の春を迎えました。なんだか、節目は人間に色々な希望をもたらしてくれるなあとしみじみしております。

ポンテ  
ピザとジャグリングの架け橋 (4)  
近況とピザ回し練習会のお知らせ

## そいそい

色々事情があって只今イタリアにおります。南はピザの本場・ナポリから北は2006年に冬季オリンピックが開催されたトリノまで、イタリアを縦断する予定です。イタリア旅行の目的は、イタリア語学を兼ねた観光が半分と、今月7日(月)から9日(水)まで絶品の生ハムで有名なパルマで開催されるWorld Pizza Show 2014を見に行くことが半分、といった感じ。只今その取材の準備のため、ピザ回し論については今回はお休みさせていただきます。代わりにと言ってはなんですが、4月27日(日)に代々木公園で筆者が開催するピザ回し練習会を告知します。ピザ回しをやったことない方から経験者まで役に立つピザ回しワークショップを行いますので、「ピザ回し気になるなあ」とふと頭によぎった人はぜひ代々木まで！ワークショップの内容については、ピザ回し初心者のための「ピザ回しの始め方講座-投げ方から指回しの練習の仕方まで」と、ピザ回し経験者にも参加して欲しい、「ピザボディスローを主に扱う「1ピザの投げ方、転がし方、渡し方のバリエーション講座」の二つを行う予定です。詳細はtwitterの@SOYx2で近日中に公開しますのでお楽しみに。 ■

海外ジャグリング紀行 (4)  
シンガポールで出会ったこと。(前編)

## 青木直哉

また来てやったぜ。と心の中で思う。

チャンギ国際空港。きれいなカーペット。明るい室内。無料のWi-Fi。よく分からない野菜の意匠をまとったキャラクターのオブジェ。

昨年2013年の5月にシンガポールには一度来ていたのだが、それほど間を置かずして、今年2014年2月、再び訪れた。

「よくもまあそんなにひっきりなしに海外に行くよね」と友人達は言う。端から見たら少し異常なペースで海外に出ていることは確かである。

とても運が良いことだと思っている。まずもって留学に行けたのも良かったし、イタリアの周辺国をいくつか回れたのも良かったし、その時に各方面に色々な人種の友達が出来たことも良かったし、とにかく今はその時の縁を元に日本以外の国に赴く機会が増えている。

そうして訪れたシンガポール。二回目。前回訪れたときも、ジャグリング関係の仕事であったが、今回も果たして、ジャグリングの関係で呼んでもらっている。

空港の、入国審査を出る。出口のドアが開き、さて、彼は待っているだろうか、と辺りを見渡す。きよろきよろしていると、前の方からニコニコと笑いながら、一人の細身のシンガポール人が駆けて来る。着古しのフェスティバルTシャツで出来たバッグを持っている。着ているのも、かつてのファイアーフェスティバルのTシャツ。目は細く、髪は少し長い、アシンメトリーに整えてある。少しオタクっぽい。本人も自分で言っている。だが、別に近寄りたがる雰囲気だとかそういうわけではなく、オープンすぎず、閉鎖的すぎず、といった感じの、日本人が接しやすいタイプの人である。日本のアニメや、文化も好きなようである。今思えば随分中華系の顔をしている。イギリスで初めて出会った時は、同郷の人に飢えていたときでもあったので、思わず日本人かと思ったものだが。これがゼンハオだ。彼とは、留学中に訪れたイギリスで出会って以来の付き合いである。

思えばそれは2年前の話。もう2年前だとも思うし、たった2年前だとも思う。されど隔たりのあることだと思ふ。留学中の思い出は、全て「過去」となっている。勿論今以外は全部過去なのだが、とにかく、「昔の話」になりつつある。写真を見ても、今とは私もゼンハオも少し顔つきが違う。私は留学中によく20歳になったくらいであったから、まだ少し身体的成長の余地があったのだろう。ゼンハオは、その時確かすでに23歳くらいであったはずである。だがとにかく違うのである。留学のことを思い出すと、自然それは私の青春と重なる。

というわけで彼と空港で合流し、タクシーでその日の宿まで向かう。宿といっても、ゼンハオの家である。彼の家はなかなか大きくて、マンションのひとフロアを持っている。小さな日本人一人を泊めるくらい造作もないことのように見える。現に、私以外にもちょくちょく、見知らぬ人が出入りしていた。

部屋に案内してもらおう。普段は彼と彼のお兄さんが寝ているという、部屋である。天井には、海の家で見かけるような大きなぶんぶん回るファンが取り付けられている。クーラーもついている。赤道直下に位置するシンガポールでは、冷房施設がないと、とてもやっていけない。勿論、常夏である。常夏というと、なんとなくただ「暑い」というイメージだけが湧くが、本当に、年中いつ行っても「暑い」のである。だから、当然クリスマスの時期に行っても、暑い。真夏のような暑さの中、クリスマスツリーが飾ってある光景は、風流も何もあったものではない。

飛行機でこわばった身体のまま寝て、朝起きると、来た仕事に備えて練習をしに行く。一度来たことがあるし、なによりシンガポールはそれほど大きい国ではないので、行動する範囲も狭く、大体のことは覚えている。

昨年フェスティバルが開かれたのと同じカラNCという場所に行って、練習場所を開けてもらって、ゼンハオに見てもらいながらウォーミングアップをする。一度来ただけなのに、随分と色々なことが楽である。もしかして、シンガポールなら、住んでも良いかもしれない、とまで思う。いや、しかしこれは、たまたま自分がいる環境がいいせいかもしれない、とも思う。シンガポールに

住むのは、どういう感じなのだろう。だが間違いなく、四季はあつて欲しいものだ、と思う。

次の日には、大勢のビジネスマンの前で演技をした。ビジネスイベントなどできちんと「仕事」としてパフォーマンスをするなどというのは初めてであったが、別にとりたてて緊張するでもなく、むしろ観客からの期待の度合いが低くあつて、少し適当な気分で特別言うこともない演技をすることができた。結果、そこそこの歓声とそこそこの拍手が来た。だが別にこれは私が適当なことをしたから、というわけではなくて、見ていてくれたシンガポール人の友人が言うには、「彼らから拍手をもらうだけでもなかなか難しいことよ」ということなのだそうである。そう言われると、私のパフォーマンスにはあんまり興味はなさそうな、商取引の話のほうが関心がありそうな人たちがいっぱいいた感じがした。とにかく、EJCとは、演じる目的が違うということは、ひしひしと感じた。こういうことも、仕事なのだ、とも感じた。別に悲しかったわけではない。ただ、いつもジャグリングを面白いと思う人ばかりが相手ではないのだな、ということが、新鮮だった。

仕事を終わると、もう気分は晴れやかである。あとは、別のジャグリング関係のイベント、マーチワークショップシリーズにおいて、ディアボロの講師をする仕事があるだけである。だがこちらの方も、初めての経験だ。何しろお金をもらって講師をするのだから、いい加減なことではできないと思って、シンガポールのアイオンという百貨店のスターボックスに半日もつて、簡単なインストラクションをA4で3枚、絵入りで仕上げた。まあしかし、こちらの方は随分気が楽である。なんせ、知っている人が周りにいっぱいいるからである。

そのマーチワークショップシリーズには、ゲストとして私の他に、二人のマレーシア人、マーヴィンとアイフィークも来ていた。彼らはそれぞれ、コンタクトジャグリング、コンタクトポイ他スイングの道具が非常に上手い。マーヴィンに関しては、“M research”というクラブマニピュレーションのビデオが一度ミニストリーオブマニピュレーションというサイトで紹介されていたから、ご存知の方もいるかもしれない。

そして何よりアイフィークは、こちらが二段階くらいギアを上げないと追いつけないほど、陽気な人間である。彼は朝会うと、いつでもハグをしてきた。そして常に「フルパワーアアア」と叫んで全力アピールをされていて、やかましい。顔は渡辺謙に似ている。イケメンである。しかも彼の奥さんは、どこぞの女優かと思まごうほどの美人である。

そして、あのゼンハオ君も、ゲストという扱いで、サイトスワップのワークショップや、サーカストークというトークセッションの司会を行っていた。

そもそものマーチワークショップシリーズというのが、生まれたてほやほやのイベントで、まだまだ人数も30人くらいしか集まらない小規模なイベントなのだが、なかなか面白いイベントだった。

メインイベントは、ワークショップだけである。4人のゲストが、思い思いのワークショップを行う。その他に、先述したようなセッションや、交流会、地域の人を集めての練習会、なども行われる。そしてイベントの主旨としてなにより、「ジャグリングをシンガポールで広めたい」というものがあるのである。

ジャグリングをしようと思えばすぐに仲間が見つかる東京にいと分らないが、やっぱり、ジャグリングをすることになると、一緒に切磋琢磨する人が欲しくなるのが道理なのである。それで、まだまだそういうことが難しい国もいっぱいある。そのことを強く感じた。

(後編へ続く) ■

↓マーチワークショップシリーズ最後の記念撮影 (撮影：BORN FIRE)



## 編集部より

### 記事募集のお知らせ

寄稿を受け付けています。基本的にはこちらから声をかける場合が多いですが、「こんなものを書きたいぞ」という相談から、「こんなものを書いたぞ」という、引き返しの出来ない挑戦まで、なんでも下記のアドレスに連絡か、直接どうぞ。次号発刊は4月21日（月）寄稿締め切りは4月18日（金）23:59まで。 ■

[jugglernaon@gmail.com](mailto:jugglernaon@gmail.com)

ponte 編集長 青木直哉

### 次号予告

なんだか、諸処のことに気を取られていて、今号は全然記事を書くことを失念しておりました。失敬。そのおかげで、色々と自分のことは捗っていました。ちょっと「書きたい欲」が緩んで来たので、なにか講じよう。そうそう、春だし、何か、新しいことをやりたいですね。海外ジャグラーの紹介も本腰を入れるぞ。 ■

ポンテは公式サイトでご覧になれます。

書くジャグリングの雑誌：ponte

<http://jugglingponte.tumblr.com>